

大阪の教育

大 阪 教 师 会

〒596-0814
大阪府岸和田市岡山町
443-13
電話 090 (7363) 9544
振替口座 00910-9-1433

第62回教育研究大会

三重大会行われる

令和6年度第62回教育研究大会が、8月4日、4日市市地域振興センターで開催された。主管は再興された三重県教師会である。

三重県教師会は、昨年の岐阜大会に参加した若い教師を中心に、本年の大大会開催を目指して、活動を再開したのである。それだけに、活気と爽やかさを感じる大会となつた。

研究主題は、「地域と共に創る教育」郷土を教え、郷土を愛し、地域創生をはかる」とし、記念講演、実践発表を通して研究・協議が行われた。

午前十時、副会長の言葉で開会式が始まり、国歌斉唱、会長挨拶と続いて渡邊会長からは次のような呼びかけがあった。

「教育は学校での学びだけで完結するものではなく、地域と手を取り合つて実践すべきである。

地域には豊かな歴史・文化そこに生きる人々の知恵や経験があり、それらの資源を活用することで子どもたちにより豊かな教育ができる。この大会の具体的な実践を通じて、地域と共に創る教育のあり方にについて研究協議をし、新たな実践に繋がることを期待したい。」

続いて主管の三重県教師会を代表して溝口哲志先生から歓迎の挨拶があつた。今回のテーマは三重県教師の会員が集まり、教育課題を話し合つた中で出てきたものです。

三重県の産んだ松尾芭蕉の言葉に

「不易流行」があるが、昔から伝わる文化・伝統のよさを伝え、全国から集まつていただいた会員の皆様の思いも、全国へ広がることを願つています。

午前の研修は記念講演で、演題は、「地域連携とこれからの人材育成」講師は東京海洋大学の和泉充名譽教

授であった。先生は大学等で超伝導モーターの研究をしているが、昨年度まで鳥羽商船高等専門学校の校長をしていて、そこで体験や大学で関わられた地域連携の実践例をいくつか紹介された。そして、どこの地域にも課題があり、それを専門家として地域の人々と協力し解決する必要がある。その活動に学生が取り組むことで、将来、地域の人材としての成長が望めるとされた。

（概要は次頁に掲載）

午後の研修は小中高の実践発表であつた。小学校からは津市立美杉小学校の溝口哲志先生が「ITC機器

を活用した地域学習の実践」と題して発表した。美杉小学校は津市の山間部にあり、八校が統合してできた小学校である。そのため児童は地域の地名も知らないなど、地域の特

色や魅力を保護者も含めて理解が不十分であった。そこで総合的な学習を実践し発表した。

『記念講演』

地域連携とこれからの人材育成

東京海洋大学名譽教授

和泉 充

一、はじめに

文部科学省は、二〇二〇年度より小中高順次展開されている新学習指導要領において、社会と連携・協働しながら子どもたちの資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現を重視しており、「コミュニケーションプロ」（地域のために自分は何ができるかを考え、自分のプロジェクトを考え実施していく）を学年テーマの下で実践した内容であった。

高等学校は県立相可高等学校の新谷和昭教諭で、「本校におけるSBPの取り組み」と題して実践報告でした。

SBPとは地域の課題をビジネスの手法で解決していくという取り組みである。生産経済学科が「園芸福祉」という発想で地域の産物を加工して新製品を開発し成果があつたという。

三つの実践発表は参加者の関心を呼び多くの感動、感激、質問や意見が出て、渡邊会長の講評で締めくくられた。

続いて総会閉会式に移り、次回京都での再会を期して散会した。

「イ・スクール」と「地域学校協働活動」との一体的推進を図っている。

実際に小中高、大学では、地域の産業界との連携を欠かすことはできない。

学校が立地する地域、学生が就職していく産業界が連携することは非常に重要である。

学校の位置する地域の人々とのつながりも大切で、地域と関わりなくしては教育は成り立たないといってよい。

二、鳥羽商船高専の取り組み

(1) 本校のデジタル人材の育成

政府はデジタル田園都市構想を掲げ、日本のどこへ行つても情報環境を確保することを目指している。そのため情報関係の教育が強化されており、本校情報システム工学科では、情報リテラシーの勉強を徹底し、その後四、五年生で課題学習に取り組ませている。

地域には様々な産業があり、そこへ学生を送り出し、漁師や農家の課題を聞いてきて、それをデジタルの力で解決することを体験している。物作りを疎かにしているのではなく、情報の有効性を確かめるのである。

国は政策としてスタートアップを奨励している。本校では起業家精神を育てるために一五、六歳の学生は何故なのか、どういうやり方があ

るか、というところをサポートして取り組ませている。その上でグループを作り、漁業者や農家から聞き取った課題を解決に向かわせている。

△実践例▽ ウニの畜養事業

例えば、ウニ事業で困っていると

いう所が三重県にある。このウニは宮城県と違つて採つても中身が入っていない。そこで水槽の中で飼つて、昆布などのエサ与えれば身がついて

はと考えた。三重県にはワカメの端材が出るので、それをやつて育てた。

これが大きな事業になり、全国五校の高専が協働し、食料安全保障の観点からも重要度が高く、文科省の科研費を使って実施された。

こうした事業を通して、学生達には課題を発掘し解決する力と起業家マインドを持つ、社会に活躍してほしいと願っている。

(2) 社会に開かれた教育

国はサイバーセキュリティが、国

の安全保障に関わるとして、その人材の育成を急いでいる。本校に関連するところで、港湾の物流や陸上の流通に関する情報システムに外部から侵入されることは困る。しかし、国は中枢の所は守るが、民間は民間でま

らなければならない。そのため賞など

三重県では三重大学の情報関係の大

学院と鳥羽商船の情報システム工学

科が学生定員を増やし、人材育成す

ることになった。

△実践例▽ カキ殻タイル事業

現在、高専学校向けにコンテストが多くある。一昨年非常に卓越した

評価を得たのが本校と豊田高専、岐阜の企業の連携による事業である。

カキやサザエは中身を抜いた後に殻が大量に出る。これは産業廃棄物として処理するのに費用がかり、困っている業者から、処理の要望があつた。それを聞いた本校と豊田の学生

は、岐阜県のタイル業者が粘土の減少で困つてると知つて、カキ殻の活用を思いついた。実際にカキ殻タイルを試作すると、焼かなくともかなり強度が出て、しかも、二酸化炭素を吸収する特性のあることがわかつた。

問題はどこで使うかだが、学生はすぐにサウナで使うと気づいた。そこでカキ殻タイルをサウナの内壁に使ってみると、結果が非常にいいことが分かつた。タイルはカキ殻をすり潰し、形成して乾かせば出来る。

その強度を測定し、二酸化炭素の吸収量を計ると大変よい結果が出た。

それが全国のコンテストで文部大臣

賞などの賞を得たのである。

(3) これからの人材育成

温暖化が進み、漁業でも魚が養殖

へと動きが進んでいる。消費者は美味しい魚が食べたいという要望があ

る。そこで魚を捕るのではなく作るこ

とになり、科学的に養殖するため

デジタル化の活用が期待される。

農業でもラジコンで肥料を散布す

るなどの方法が取り入れられており、

若い従業者と学生が、コミュニケーションを取つて一緒に課題を解決し

ている。これらの事業は、人材育成でもある。しかも地域の活性化にも寄与している。

た体験を通して、学生にビジネス感覚を育てている。

三、大学での取り組み

大学の場合は、日常の研究活動とリンクした地域活動、産業連携が主体となる。大切なことは担当する教職員が地域連携の意義をしっかりと認識することである。

三陸の復興支援事業

東京海洋大学に在職時は、東日本大震災の前から、三陸での产学協同の事業を立ち上げ、二〇一九年までずっとその担当をしてきた。

△実践例△ 小中高への指導

災害が起きてから子どもたちは海を怖がるようになつたり、魚を食べなくなつた。そこで小中学生にサテライトにきていただき、海に関する質問、エルニーニョ、津波、海底地震、特に津波がきた時の対応等について意見交換をした。

紙面の都合で今回は割愛させてもらう。

実践発表△ 小学校△

「ICT機器を活用した

地域学習の実践」

津市立美杉小学校教諭 溝口哲志

これまで地域学習のまとめは壁新聞の形で行われることが多かつた。

せっかくの地域情報が学級内で留まり、家庭や他学級に公開することが難しかつた。また作業が授業時間内に限られることが課題であつた。それをICT機器で解決できるのではなかとを考えた。

道徳科との連携と考えたが、探究

活動まで発展しなかつた。そこで総合的な学習で、地域の魅力について調べ、発表する学習を組んだ。

子どもたちは美杉の地域のよさを見付けることを問題解決することにした。早速、家や近所にも聞き取りに出かけて「六田さんによる秘密」「川上あまごの美味しさ」など聞き取り、美杉のよさを知ることができた。それをイロイロノートを活用し、調べた。そしてプレゼンを行い、結果を他学年や家庭にも広げることができた。

△中学校△

「地域と学校の協議による『未来の創り手』の育成△古川中のマイプロ（地域貢献）の取り組みを通して△」
飛驒市立古川中学校校長 中村裕幸
飛驒市では、子どもたちを「未来の創り手」とするための資質・能力

を社会総掛かりで育成するプロジェクト「飛驒市学園構想」を推進し、目指す「創り手像」と「地域像」を

これまで地域学習のまとめは壁新聞の形で行われることが多かつた。せっかくの地域情報が学級内で留まり、家庭や他学級に公開することが難しかつた。また作業が授業時間内に限られることが課題であつた。それをICT機器で解決できるのではなかとを考えた。

そこで本校は、大正大学教授浦崎太郎教授の指導を受け、「マイプロジェクト（マイプロ）」を核とした、地域学校協働活動を展開している。コロナ禍で地域活動が減少する中、地域の要望を受けて吹奏楽や合唱を披露したところ住民に大変喜ばれ、子どもたちは大いに自信をつけた。

そこで学校と地域が連携し、「地域貢献」に繋がる活動を話し合い、総合的な学習の時間のカリキュラムを作成した。

現在、一年生は「防災」を題材にし、防災の知識や技能を身に着けながら、生徒自身が「何ができるか」がどう取り組むか」を考え、行動に移すことを体験している。

二年生は、「職業（キャリア）」を題材に、知識と技能を学びつつ、職場体験学習に繋げている。

三年生は「地域貢献」を題材とし、市のまちづくり観光課や観光協会と連携しながら、生徒一人ひとりが「自分は地域のために何ができるのか」を考え、地域のニーズに応えるためのプロジェクトを立ち上げている。

ワーキショッピングに参加し、地域の要望を聞いて公園に「手作りベンチ」を設置した。家庭科で学んだフードロスに关心を持った生徒が、町内の果樹園で商品にならなくなつた桃をスムージーに加工して売り出した。生徒達は地域の人と関わり合い、行動を起こすことで感謝される経験をし、地域を元気にしたことを実感し、自己有用感を高めている。

△高等学校△

「本校におけるSBPの取り組み」
三重県立相可高等学校教諭 新谷和昭

SBPとはソーシャルビジネスプロジェクトの略で、地域の課題をビジネスの手法で解決していく取り組みである。

本校の生産経済学科では、「園芸福祉」をテーマに取り組んでいる。それは「花や野菜を育てて、みんなで幸せになろう」という願いを込めている。

実際に活動を始めると、高校生のボランティア活動では限界があり、生徒数名でNPO法人化をした。円滑な運営が可能となり、事業を次々と成功させることになつた。

最初にコスメ開発に着手し、地元

産のミカン、柿等を使ったハンドジェ

ルを開発した。また、大手製薬会社と共同してリップクリームを売り出し、ブランドの基礎を築いた。

その他、地元産業の牛乳やゆずを原料にした日焼け止めクリームやハンドクリーム、耕作放棄地の茶畑から拾ったお茶の実を使つたヘアオイル等の開発をし、これまでに一億円以上を売り上げた。

生産経済学科の活動は、こうした売り上げの一部を活動資金として、保育園で野菜栽培への奉仕、高齢者を対象とした園芸福祉の活動など、広がりを見せていく。

今後も地域づくりを目標に、地域で活躍できる人材育成に努めたい。

この高等学校の食堂は、生徒が経営主体となって運営されている。しばしばTV報道されていて、生徒の姿を拝見すると、立派な会社組織として運営されている様子が拝見できる。生徒は、多様な能力を持つているので、知識だけの教育に偏ることなく、能力・技能開発の高校教育が求められているような気がした報告であつた。

教育春秋

令和6年 新年早々、文科省の小中学校の不登校児童生徒は、およそ三

十四万人以上と発表した。

この数字を聞いた学校関係者はどのように受け止めたでしょうか。

私は最近小中学校の支援学級の担任を経験した。その経験からいえば、少しでも担任の支持通りにしない、理解度が低い等があると支援学級送りになり、(小学校) 中学校では、そのような子どもは不登校の状態になるか、学級に入れない状態になつているなどである。何故そのような状況になつたのかは、次号より報告します。

協賛校名一覧

二十一世紀は、私立学校が、子育(人育)でをリードする

淀之水学院昇陽高等学校

早稲田攝陵中学校・高等学校

東大阪大学敬愛高等学校

清風中学校・高等学校

訃報

兵庫教師会会长

赤司 久明先生

令和五年十二月ご逝去されました

興國高等学校

清風南海中学校・高等学校

履正社高等学校

四天王寺中学校・高等学校

謹んでお悔やみ申し上げます
先生には永きにわたり大阪教師会の毎月の例会に参加され
て、教育問題、これから教師会のあり方などについて指導助言をいたしました
心安らかに、私たち日本教師会を見守つてください

天満学園太成学院大学高等学校

